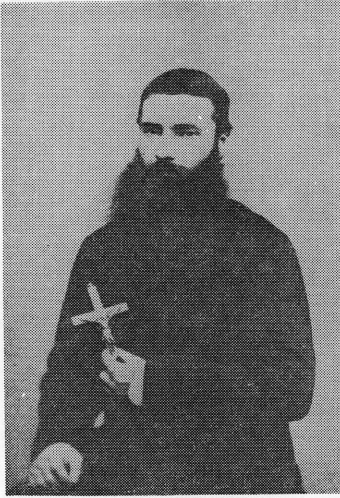


ジラール神父のこと 富田 仁

幕末、日本が長年の鎖国を解いて開国へ大きく転換期を迎えようとしていた頃、琉球にフランス人宣教師がやってきた。それはフォルカード神父であった。この間の事情は拙著『佛蘭西學のあけぼの——佛學事始とその背景——』（カルチャー出版社）に記したので詳述を避けるが、一八四四年（弘化元年）四月二十八日、フォルカードはオーギュスタン・高という清国人を伴ない、那覇に來航したのである。フォルカード神父は二年間幽囚の日々を過し、結局は日本



ジラール神父

開教の機会に恵まれずに帰国しなくてはならなかった。

だが、安政元年ペルリ提督が日米和親条約を締結し、日本はついに開港した。このような開港はキリスト教伝道の機会をもあたえていた。ローマ法王庁は中国東北地方（滿州）に布教中のコラン師を日本教区長に任じたが、コラン師は琉球伝道を志して遼東の地まで来たが病没した。コランの遺命により三人の宣教師がフランス汽船リオン号で香港から那覇に到着した。メルメ・カシヨ、ルイ・テオドール・フェウレ、プリュダン・セラファン・バルテミー・ジラールの三神父である。安政二年三月のことであった。

「三人は漸くにして上陸を許され、同じく聖現寺に幽閉させられた。同年五月、佛蘭西軍艦シビュ號が入津し、日本との通商條約を締結せんがため、通譯としてフェウレを伴ひ平戸や長崎に航したが、フェウレは上陸しても滞留する事を許されず、香港へ赴かざるを得なかった。安政二年（1851）十一月、佛蘭西水師ゲランは、琉球と通商條約を締結し、其結果としてジラールとメルメとはフォルカード以來舊縁の聖現寺を去って、那覇の中央なる松尾に移ったが、傳道は依然として禁ぜられた。安政四年（1857）十月、フェウレと

ムニクウとが那覇に来て、メルメと代り、彼は香港に歸った。翌
政五年十月、佛蘭西軍艦レジジャン號が來り、日佛條約の締結とジ
ラルの日本教區長任命とを告げ、ジラルとメルメとを伴うて、
フェウレとムニクウとを残して去った。フェウレは老年のため語學
も進まないが、醫術を心得て七八里の遠方まで招かれて治療に赴い
たらしい。ムニクウは、香港にて支那語を學んだ事があるので、日
本語や其轉訛せる琉球語をも多少知るに至った。萬延元年(1860)
十月、プチジャンが來り、ムニクウは代つて去り横濱に赴いた。プ
チジャンとフェウレとは、琉球政府に向つて布教許可を請うたが、
儒教が行はれてゐるから別に基督教を要せずと答へて、許さなかつ
た。次いで文久二年(1862)九月、デュブレイ號が入港して、ジラ
アルからの宣教師引上の指令を傳へ、弘化元年フォルカドが初めて
上陸してより既に十八年を閲した。」

(比屋根安定『日本基督教史』第四卷・四六〇―四七ページ)
沖繩におけるキリスト教伝道の歴史の中で占めるフランス人宣教師
の役割は大きい。もっともこの時期の伝道効果はきわめて乏しか
つたが、沖繩經由でキリスト教が日本に拡がっていったという事実
を看過してはなるまい。その伝道の先駆者のひとりがジラル神父
であった。この神父はキリスト教伝道の上でのみならず日本におけ
るフランス語教育の面でも少なからぬ貢献をしていた人物であり、
カシオンとともに仏蘭西学研究上きわめて興味深い神父なのであ
る。

ブリダンスールセラファンバルテミー・ジラルは、一八二二年
四月五日、シエール県アンリシユモンに生まれた。一八四五年五月
十七日、当時人口五千人ほどのサン・ピエール・ル・ギャール聖堂



山手カトリック教会会堂内
(左手ジラル神父頌碑)

区のブルジュで助任司祭となつたが、二年後の一八四七年八月十
八日にはパリ海外布教団神学校に入り、翌年三月二十九日、日本に
向けて出發した。もっとも、日本が領国中のために香港で待機した
あと、メルメ、フェウレとともに琉球入りをしたのであつた。

『パリ海外布教団報』*Mémoires de la Société des Missions
Etrangères, tome II, 1916* によると、ジラルは一八五七年六月
十五日に日本教區長に任命され、翌年には琉球から江戸に赴き、デ
ュシェーヌ・ド・ベルクール総領事の通訳として滞在したことにな
つてゐる。実際にはジラルが教區長任命の報に接したのは安政五
年(一八五八)十月那覇でのことで、デュシェーヌ・ド・ベルク
ールが日本に着任したのは安政六年(一八五九)八月十日のことであ
る。ジラルはこれに同行していたのである。

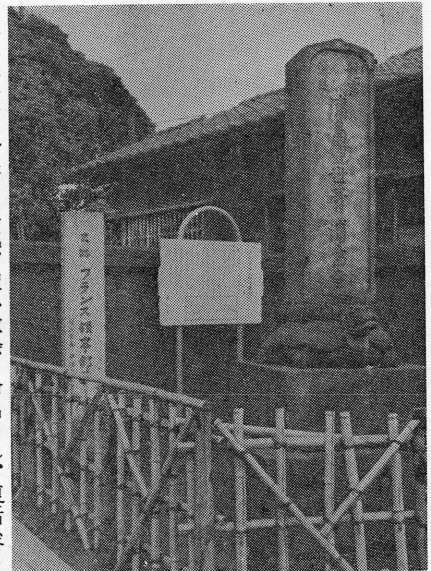
ジラルは三田の濟海寺がフランス総領事(のちに公使)の宿館

に当てられたので、そこに暫時同居したが、通訳官としての任務と同時に聖職者としてのそれをも忘れなかった。

「その通訳官の任務はジラル師になによりもまず自分が伝道師であるということを決して忘れさせなかった。彼は江戸と神奈川の湾内に投錨していた艦船にたびたび赴いたが、それは病人たちに宗教の救済をもたらすためのものであった。当初から、彼はみずから云っているように、ベルクール氏の庇護の下に江戸で行なった献金を神奈川にカトリック礼拝堂を建立のために陸路と海路で運ぶのに専念した。」(マルナス『十九世紀後半の日本で復活せるキリスト教』第二巻 三四四ページ)

すでに日米通商条約も締結(安政五年)していた。その第八条によってアメリカ人は礼拝堂を居留地内に建てる事が認められ、踏絵の制度も廃止されることがあきらかにされていたが、日仏両国の間にも同様の条項が取りきめられていた。ジラルが横浜にカトリックの礼拝堂をつくろうとしたのも、そのような動きの表われにほかならなかった。

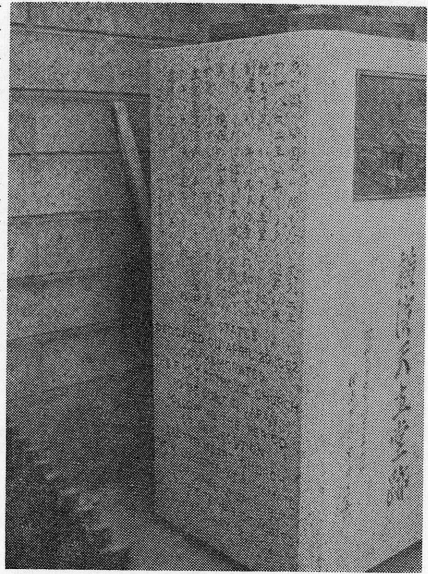
「一八六〇年(万延元年)右の条約に従い、フランス政府は横浜居留の外国人に宣教の目的を以て天主堂の設立を企て、幕府より横浜居留地八十番(現在の山下町八十番、ニューグラント・ホテル裏)の永代借地権を獲得した。既に前年、神奈川駐在フランス総領事附通訳として来住したパリー外国宣教会所属のジラル神父は日本教区長に任命され、領事館の公務を処理する傍ら、聖堂建設寄金の募集に奔走され、同年末清国より着任されたムニーク神父もまた建設工事の監督を引受けられ、両師とも席の暖まる暇もなく働かれた甲斐あって、工事も次第に進捗し、翌一八六一年十一月十一日



神奈川初代フランス公使館跡・慶運寺
(東神奈川)

(文久元年十月)漸く落成、聖心教会と命名され、復活後日本最初のキリスト教会が誕生したのである。ここにゴシックと寺院風とを調和した高塔の頂きには、金色の十字架が燦然として輝き、鎖国以来久しく見られなかった往古キリシタン時代の風景を初めて再現させるものがあった。」

(片子沢千代松・助野建太郎『横浜キリスト教史』七〇八ページ)
文久二年十二月、すなわち一八六二年一月十二日、この礼拝堂の献堂式が盛大に執行され、同日付で幕府から在留外国人への布教許可をえた。横浜の天主堂には多数の日本人が噂を伝え聞いて訪れ、ときには千人もの人びとが「耶蘇寺」見物にみえたので、当時なおキリシタン禁制下の日本であれば、幕府としてもこれを黙認するわけにいかず、神奈川奉行所は天主堂訪問の日本人をまず三十三名、翌日には二十二名、二日間で合計五十五名を捕えた。このために日



横浜天主堂跡

本人は怖れをなして天主堂に近づかなくなったが、フランス総領事ド・ベルクールはすぐさま強硬に抗議を行ない、逮捕された人たちは戸部監獄から解放した。世に謂う横浜天主堂事件であった。

さて、ジラール神父は仮寓中の江戸の濟海寺においてド・ベルクールの通弁官として大いに尽力していたが、その余暇に日本人にフランス語を教えようとしたか、あるいは教えていた形跡がある。

「一八六〇年、フランス語の講義を行ないながら、もっと容易に日本人と接触するために、彼は横浜に土地を購入した。」(『パリ海外布教団報』)という記録もあるが、これによると、横浜の地でフランス語を教えたというふうにも解釈される。一八五九年末には日本にはフランス人宣教師としてはジラールとカシヨンの二人がいたにすぎないが、前者は江戸と神奈川、後者は箱館にいたのだった。ジラールの場合、江戸と神奈川(横浜)を往復していたわけだ

が、江戸の地にあつては幕府に対してフランス語教授について許可を申し出ている。

(外国御奉行様)
「ガイコクゴブギヨウサマ江

シヨカンヲ (書) (翰) (以) (申) (上) (侯) (當濟海寺)
モツテ (最善) (正泉寺) (別宅) (侯) (相) (顧)

テゼマニツキ (手) (務) (付) (最善) (正泉寺) (別宅) (侯) (相) (顧) (御書翰)

ムロー (侯) (處) (許) (容) (段) (御書翰) (十一月二十二日) (ゴシヨカン)

ヲ (以) (仰) (下) (有) (難) (存) (侯) (薩)

ツイテハ (就) (同) (寺) (別宅) (上) (佛蘭西國) (語)

マナビタキ (學) (度) (人) (之) (有) (餘) (傳) (習) (致)

ベク (可) (餘) (問) (政) (府) (於) (然) (可) (人)

タ (事) (御) (選) (御) (進) (成) (候) (右) (心) (適) (候)

トハ (間) (點) (切) (教授) (致) (可) (候) (右) (付)

アヒダ (御) (遺) (成) (候) (右) (付) (御) (座) (侯)

ハイク (拜) (具) (謹) (言) (御) (座) (侯)

キング (安政六年十二月二十五日)

シラール (一千八百五十九年十二月十八日)

P.M. Girard]

幕末外國關係文書之三十二)

これに対して、外国奉行柴田剛中と水野筑後守のつぎのような返

書が残されている。

「去る廿六日、佛蘭西通弁官より私共迄書翰差出候ニ付、披封一覽仕候処、同人儀、先日、御差許相成候通り、正泉寺江移宿仕候上は、御國之もの、同國言葉稽古仕度ものへハ、教授いたし度との趣ニ有之、一体御條約面ニも、御定被爲在候通り開港後五年相立候上は、彼我とも別段譯文相添不申、書通往復仕候積有之候得とも、外國語修業仕候事ハ、一朝一夕之譯には參り兼候間、只今より諸國語等爲心懸置不申候節は、其期ニ至り、御差支相成可申は勿論、當今之場合も、英佛語等出來之もの無之而已ならず、蘭語とても熟習候ものすくなく、通辨、翻譯とも時々差支、右ニ付居ながら機會を失ひ候事も不少、行違も生しやすく、心配罷在候間、先達而中よりも、右儀ニ付而ハ度々申上候趣も有之、御下知濟相成居候へとも、通弁御用之方差湊、右同濟之趣取計候猶豫無之、當今之姿ニ而は、此上見留も附兼、且右稽古之儀は、又傳修業仕候と、實地接話仕候とは、格別之相違有之、成熟之運ひも容易ニ可有奉存候、就而は、右様申出候を幸ひ、御家人之内、部屋住・厄介等、年若ニ而洋學稽古望有之候もの共之内、私共人撰之上、彼方江差遣し、宿寺詰御目付方立合之上ニ而、傳習爲請候ハ、不取締之儀も生す間敷、追而は一廉之御用弁相成、御都合宜敷可有之尤右は私共限り挨拶可及筋ニは無之候ニ付、前書之意味差合、別冊之通可申遣哉奉存候、外國立合役々申談、依之右返翰案相添、此段奉伺候、以上」

〔大日本古文書 幕末外國關係文書之三十二〕

フランス人通弁官がフランス語教授を希望したこと、日本人には英語もフランス語も解する者がいないこと、實地接話による効果、さらには御家人中から人選して伝習を受けさせるべきであることな

どが取り沙汰されているのである。

もつとも、引用文中にみられる「同人儀、先日、御差許相成候通り、正泉寺江移宿仕候……」という反面には注意したい。これはジラルが駐日フランス総領事デュシェーヌ・ド・ベルクルの宿館であった三田の濟海寺が手狭になったことで、濟海寺から近い正泉寺に移宿した事実を示すものとして重要なのである。

ジラルが正泉寺に別居したことに關する文書も残されているので引用しておこう。安政六年十一月二十二日付の外國奉行書翰である。

「佛蘭西使臣館書記官

エスクワイル

ジラル江

先頃其許別宅之儀ニ付、申入たる書翰之答として、差越されし書中、其許願之旨不聞屈事之ことく思取られしと見へ、云々之次第申聞られたるには驚きぬ元より外國々使臣館附屬の者共別宅之儀無故障害なれハあなから其許にのみ差ニはみ可申筋はあらされとも國々の使臣館地所も近日之内談判いたし可取極積なるにより、其世子ラール、濟海寺に住居せられんことさへ、今よりハ、日久しき間はあらさるへきなれハ、夫までの處は暫時その儘にあらんこと、子細あるましくと思ひ申入しにて、聊か他意あるにあらず、されハ、正泉寺へ別宅之儀は、達て懇望あられんにハ、我等におおても固より異議を容さるなり、拝見謹言、

安政六年未十一月 日

赤松左衛門尉

酒井 隠岐守

新見 豊前守

堀 織部正

村垣 淡路守

竹本 圖書頭

〔大日本古文書 幕末外國關係文書之三十二〕

正泉寺は現在の御田小学校のところにあったが、いまは目黒区に移転して、そこにはない。

「正泉寺跡 芝三田台町一―二〇

幕末当時は現在の御田小学校の地であったが、安政六（一八五九）十一月二日フランス総領事館通弁官ジュールは宿寺濟海寺の居室が狭いので、暗いために移転した。同月二五日に同人から正泉寺居室においてフランス語を伝習したい旨の申し出があったが、幕府にはフランス語に通ずる人がなくて見合わせとなった。（『港区の文化財・第一集 幕末の外交史跡』二十五―二十六ページ）

ジュールとはジュールの誤記であるが、これによれば、ジュールのフランス語教授は実現をみなかったことになっている。一方では「その頃すでにジュール師は江戸で仏語学校を開いていた。（『函館とカトリック』二十二ページ）というふうな指摘もある。結局ジュールのフランス語教授についてははっきりしたことがわからないうのが現状である。

ジュール神父は横浜天主堂事件のあと、一時期日本を離れた。

「ジュール師は公使館の用務を帯びて香港へ渡り、リボア師と熟談の結果、フェウレ、プティジャン両師を琉球から引き上げさせ、日本宣教に協力させることとなった。ここに、フォルカード師渡来以来十八年を以て、日本再布教の前哨基地となっていた琉球布教は、一応その使命を終ったのであった。更にジュール師はフランス

に帰り、日本教会のため各方面の協力を懇請し、次いで日本教会附を命ぜられたローケーニュ師を伴ってローマに赴き、教皇ピウス九世に拝謁して、日本宣教事情を報告した。一八六三年（文久三年）ジュール師がローケーニュ師と共に横浜に帰着した時には、フェウレ師は長崎へ赴き、横浜にはムニクウ、プティジャン両師が、活躍していた。ただ函館にいたメルメ師がこの年帰国したため、同地の布教は一時停顿した。」

（助野健太郎『ともしびは消えず』四十四ページ）

さて、一八六三年一月二十二日に長崎に赴いたフェウレ神父は天主堂完成を待たずその年十月に帰国し、代わりにローケーニュ神父が来崎してプチジャン神父に協力し、一八六五年には天主堂を竣工させ、二月十九日ジュール教区長の臨席をえて献堂式を挙行した。ジュール神父は間もなく横浜に戻ったが、同年三月十七日、プチジャン神父はこの大浦天主堂で隠れキリシタンの信徒発見という奇蹟に遭遇するのであった。

一八六六年（慶応二年）八月、ローマ法王庁はジュール神父に代わってプチジャン神父を日本の代牧に任命した。ジュール神父は横浜に住み、威厳と慈愛にみちた聖職者として活動を続けたが、翌一八六七年十二月九日、四十六才で死去した。神父は山手カトリック教会（横浜市中区山手町四十四番地）の聖堂内の祭壇左側の壁面に左記の頌碑とともに葬られている。

HIC QUIESCIT IN PACE DOMINI/R.P. MARIA PRUDENS GIRARD/QUI JAPON. MISSIONEM PRIMO GUBERNAVIT/ATQUE HANC ECCLESIAM FUNDAVIT/XLVI ANNOS NATUS PIE DECESSIT/V IDUS DECEMBERIS 1867.

（一九七六年十二月二十九日）